

保健体育科教育法で体育の存在意義を考える —指導案づくりから取り組む体育の授業の成立根拠—

平野 和弘

学生と体育の授業

私は現在駿河台大学にて教職課程における「生徒指導」「特別活動の指導」と「保健体育科教育法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を担当している。学生の「体育教師になりたい」の要望に応えることに向き合う中、彼らの教師になる動機と、体育授業経験と教員採用試験に向けての取り組みを検討することで、彼らが仕事の対象としている「体育」の捉え方があやふやであるということが明らかになった。それは彼らが経験したこれまで体育授業において、何のために取り組んでいたのかが明確ではなく、体育で何を学んだのか、どんな力をつけたのかを理解しないまま、今度は教える側に立つという事実であった。体育教師を養成する側が、指導の仕方や取り組み方を再構築することが求められている。

体育教師の存在の意味や「教科体育」の存在意義をきちんと言葉で語るができない。どのような体育の授業を構想したらいいのか、貧弱な経験を土台にしか語るすべを持っていない。これは私が受け持つ「生徒指導」の講義でも同じ課題が存在し、伊藤が述べるように¹⁾学生たちに生徒指導に対する意識の偏り「生徒指導とは校則、社会的マナー、時間の厳守といった何らかの決まりを守ることに對する全体指導、あるいは問題行動に對する個別指導と捉えている」があり、「生徒指導に對する固定的なイメージ・印象を変革できるよう指導していくこと及び自らが学校教育を通して獲得した諸経験を生徒指導の観点から捉えなおす」ことをしなければならない。本論の執筆目的は「保健体育科教育法Ⅲ」と「保健体育科教育Ⅳ」の講義を通して、学生たちの体育の存在意義に對する捉え直しを迫り、「体育はなぜ存在しているのか」の問いに答えられる学力を、どのように構築すべきかを明らかにすることにある。

体力づくりの体育

体育はなぜ学校教育の中に存在しているのか。久保は、教科体育の成立史を検討し²⁾、体育が日本に導入された明治当初にさかのぼり論述している。アメリカから指導者リーランドを招き設置された体操伝習所において「身体の發育を主」とする「普通体操」が導入され、軍式の体操や武技に對し批判的であった時代もあったことを紹介し、しかしその後、軍隊の操練法に教育的意義を与えてつくられた「兵式体操」が導入され、体育は兵隊になるための身体と精神をつくる場所になり、これは戦後まで続いたことを示し、戦前・戦中の体育の本質を「身体の教育よりも、身体による教育にあったのではないか」と述べる。

戦争する身体づくりのために存在していた体育は、戦後の民主教育導入の結果、大きく様変わりし、スポーツを媒介にした体育にとって代わるのだが、それでも身体づくりを中核とした授業に変化がなく、身体をどのように加工するか、その先にどんな力をつけさせるかに終始していた。体育の存在意義を、体力や生活指導にもとめる風潮が残り、現在につながっている。

この影響からか、学生への講義前のアンケート「体育の存在意義とは」の回答は、44名中42名(95.4%)が「体力のため」であった。

- 体力・健康(生涯にわたって)のため……………27人

● 体力・健康＋コミュニケーション能力を高めるため…15人

15名が「体力・健康」に加えて「コミュニケーション能力を高めるため」と答えた。

二人の異なる意見があった。「体育とは、身体を育てるというのもありますが、一番は、身体を動かし生徒みんなでスポーツを楽しみ、スポーツを学ぶこと。みんなでスポーツを共有しながら学んで行くこと」。体育授業の対象としてスポーツを捉えている。もう一人、「体育の授業とは生徒が身体を動かすことの楽しさや、各競技に触れていきながら、ルールや技術を高めるためにあるのだと思います。また、体育の授業を行うことによって生徒一人一人の豊かな心、思いやりの心を育てることだと思います」とスポーツに内在する文化に触れることを思い描き、その延長線上に人格にかかわることにつなげている。

体育の存在意義－文化としてのスポーツを対象に－

文部科学省は中学校学習指導要領保健体育編において、保健体育の目標を以下のように示している³⁾。「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する。そのために、①各種の運動の特性に応じた技能等及び個人生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な技能を身に付けるようにする。②運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。③生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かな生活を営む態度を養う」。この目標から体育の存在意義を導き出すと、「生涯にわたって運動ができるように、健康に生きる」ために体育は存在し、「他者に伝える力」を養うことが重要になる。体力の向上という言葉に理論と方法も加わり、科学的には見える。「身体を鍛え健康になるため」加えて「コミュニケーション能力を培う」という学生たちの答えは間違っていないのかもしれない。しかし文科省の目標で触れているように「スポーツライフ」を実現するための「資質」や「能力」はどのように育てるというのだろうか。教科として成り立たせるためには、その理論と方法をきちんと学びの体系に組み入れることが求められ、スポーツそのものを学ぶ、つまり「スポーツ」を文化として捉え、その枠組みや歴史や存在意義、そして技術を「スポーツライフ」に結びつける系統性が必要であり、それが教科の存在意義につながるはずである。これまで多くの実践家や研究者の、体育の存在意義の自問自答が、体力一辺倒の窮屈な現状を少しずつ打破させていくことになった。

城丸は⁴⁾「体育」と「スポーツ」を考察する中で、「スポーツとは、文化のあるジャンルをさすことばであって、その基礎を系統的に教えようとしているものが学校の体育科である。また、教えることをとおして基礎的な身体形成に寄与しようとしているものが学校の体育科である」と身体形成の基礎を、スポーツを通して系統的に伝えることが、体育が存在する理由の一つであると捉え、文化としてのスポーツの学習という見地から、「体育は、文化としてのスポーツの基礎の学習と、身体の全面的発達のための基礎的形成との二重の目的をもったものとして存在」と述べている。かように体育を、文化を背景とする教科であると規定するならば、出原が指摘するように⁵⁾「現在、日本各地の学校で行われている体育の授業がほんとうに子どもたちに『勉強』だとおもわれているか、『気晴らし』や『遊び』や『楽しく汗をかく』じかんだとおもわれていないか、そして私たち教師自身もまた『子どもは体を動かすのが好きだ』とか、『ボールゲームをやらせておけば生き生きしているよ』などと思い込み、それにおぼさって手

をぬいていないかどうか、これらのことが問われているのだと思える」という体育教育を検討しなければならないだろう。実際に学生Ⅰは「私は体育を遊びだと思っていました。その理由は、私が生徒の時に、先生が特に何の指導もなく、バスケットボールやサッカーをさせるだけの体育だったからです。それもそれで楽しかった」と述べている。改めて問う必要はないのだけど、体育は「教科」、勉強である。それを勉強であると思わない授業を受けてきたという事実が元にある。先述した出原は体育について⁶⁾「すべての子どもに『できる』を具体的に保障するとともに、すべての子どもに『わかる』体育をつくること」が求められているとして『『わかる』体育は『できる』体育を土台にしながらも、『わかる』ことによって『できる』をいっそう前進させるものである」としている。

保健体育科教育法という講義

保健体育科教育法はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4つの講義で構成され、それぞれ半期で2単位ずつ、中学、高校の保健体育科教諭を目指す学生は必修で取得することになっている。Ⅰ～Ⅳまでは以下のように発展的に捉えている。

保健体育科教育法Ⅰ(2年次後期)…保健体育の成立根拠、目的、または授業に取り組むための基礎・基本・教養を考える。

保健体育科教育法Ⅱ(3年次前期)…教科保健(高等学校)、保健分野(中学校)を中心に、学習指導要領を理解し、そこを土台に教科内容の研究と教材づくり、そして指導法を学び、学習指導案づくりの基礎をつくる。

保健体育科教育法Ⅲ(3年次前期)…教科体育を中心に学習指導要領を理解し、そこを土台に、学習指導案づくりができるように教科内容研究と教材づくりに取り組む。

保健体育科教育法Ⅳ(3年次後期)…Ⅰ～Ⅲで培われた力を元に、学習指導案を完成させ、模擬授業に取り組み、振り返りの中で、授業力を磨く。

今回報告するⅢとⅣについて、シラバスでは以下の通り示している⁷⁾。

保健体育科教育法Ⅲ「授業づくりに必要な保健・体育の学問領域に学び、実際の保健および体育授業の場面を想定し、指導計画づくりに取り組みます。学習指導要領を学び、保健体育の教育における役割を認識し、生徒の実態を考察した上で、教材研究に向かい、単元づくり、指導計画づくりに取り組みます。主体的・対話的で深い学びを理解し、グループによる模擬授業で指導実践に結びつけます。模擬授業後には教師側と生徒側の双方による討論を行い、指導計画改善のための手だてを探ります。保健体育の教員免許取得を目指す学生は原則として履修をすること」。

保健体育科教育法Ⅳ『保健体育科教育法Ⅲ』で学習した授業実践の学習を基に、学習指導要領で定められている体育8分野と保健分野の理解をより深め、保健体育科の目標や内容について具体的に考察が出来るようにします。そのひとつの手段として、単元計画の作成、指導計画の作成、教材づくりを行い、模擬授業を展開します。加えて、保健体育の授業外において保健体育科の教員に求められる役割についても理解を深めます。保健体育の教員免許取得を目指す学生は原則として履修をすること。」

保健体育科教育法Ⅲの授業計画－実際の授業－

シラバスに沿いながらも、実際には学生から毎時間受け取るリアクションペーパーや講義へ

の取り組み状況を勘案し 2018 年度は以下のように再編成し実施した。

NO	授業内容	キーワード	1	2	3
1	体育授業の成立根拠を考えよう	運動文化	体育はなぜあるのか	スポーツ・運動文化という視点	そもそもあなたはなぜ体育教師になろうと思ったのでしょうか
2	「みんな」が「できる」ようになる授業の構築	ドル平という泳ぎから考える	できないのはどうして	教科内容研究と子ども研究	体育の存在意義
3	体育の技術指導	フィードバック	フィードバックとは	子どものつまづきを出発点とする	学習集団論
4	指導計画の作成の実際 1	学習指導案とは何か？	学習指導案の定義	一般的な形式	いま求められる学習指導案
5	指導計画の作成の実際 2	スポーツ指導案づくり	単元づくり	本時の指導	実際の授業案との違い
6	指導計画の作成の実際 3	実践報告を読もう！	実践記録を読み取る	中学のバレーボールと高校の陸上	二つの実践報告から学ぶこと
7	指導計画の作成の実際 4	他者の言葉を聞く	互いの指導案を読み込む	何をしたいのか何を伝えたいのか	模擬授業アンケート
8	指導計画の作成の実際 5	子ども観	子どもの発達・生活課題と体育の関係	なっ、おもしろえだろ	教材研究
9	指導案 6 異質集団によるグループ学習	子ども・青年を授業の主人公へ	授業の形態	グループの質による違い	学習集団論
10	指導案 7 教科内容研究と教材研究	教材研究を深化させる	教科内容と教材の峻別	教科内容研究	教材研究
11	学習指導要領と保健体育	教採対策もかねて	学習指導要領とは	新しい学習指導要領	主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）
12	教師と身体技法	模擬授業を前に	授業の形	場の支配－授業規律と集団	体育教師になる
12	体育の授業とは まとめ	テスト！			
14	模擬授業 1	保健模擬授業			
15	模擬授業 2	保健模擬授業			

テキストとして、「スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり－指導案の基本とプラン集－ 学校体育研究同志会編 創文企画 2018年3月」⁸⁾を使用している。

講義 1。「体育授業の成立根拠」を考えるために、学生へのアンケートと、学習指導要領における体育の目標を考察した。加えて体育の文化的側面を明らかにするために、バスケットボールを例に挙げ、その成立と、ルールや内容の変容の歴史を提示し、スポーツと文化の関連について考えさせることになった。

講義 2。「できないのは誰のせいかな」との問いを検討するために「できないのは本人ではなく教える側の問題」との川口の主張⁹⁾を紹介し、「ドル平」泳法を教材に、誰もが「できる」「泳げる」喜びを経験できる技術指導について考察した。「泳げないのは指導者のせい」との定義から教師の教科内容・教材研究の必要性を伝えることになった。

講義 3。先述したテキスト⁸⁾を用いて、できない子の躓きに注目したフィードバックについて検討していく。

講義 4・5。学習指導案の書き方を中心に検討し、単元の目標、教材の取り上げ方、本時の授業の流れなど、概要や枠組みを提示した。そのうえで、スポーツを地域で教えるとしたらとの設定でスポーツ指導の計画書づくりに取り組む。自分の好きなスポーツを中学 2 年生に 6 時間で教えるとしたらとの課題を設定し、全体の計画と、4 時間目にはどのように教えるのかに取り組ませる。

講義 6。中学校¹⁰⁾と高校¹¹⁾の実践報告を読みこむ。教師は児童生徒をどのように把握し、単元の目的を決め、子ども・青年にどのように伝えていったのか、を読み解く中で、教師の願いや、子ども・青年の変容を学んでいく。

講義 7。スポーツ指導計画の続きである。同じ種目を選んだ学生同士でグループを組ませ、グループワークで互いの指導案を検討し、その意見を元に修正していくという作業に取り組む。目的や、中学生たちにどのように育ってもらいたいのか、そして「本時」はどんな流れで、どんなことを伝えるのか、どんな力をつけさせたいのかを、発表し意見交流させる中で、そのスポーツと子どもとのかかわりをつかんでいくことになる。

講義 8. 青年の実態に即して教材をつくりかえていく考え方や方法を¹²⁾、夜間定時制高校の卓球の実践から読み解く¹³⁾。荒れた青年を中心としたまとまりのないクラスが「オープン・ドア・ポリシー」¹⁴⁾を掲げた卓球の授業で変わっていく様子を読み込み、ルールを変更させる取り組みが、青年の変容をどのように促すかを検証した。

グループ学習を考えるー同質集団と異質集団ー

講義 9. グループ学習を考察する。同質集団か、異質集団がいいか。それぞれの特徴と、歴史的背景を探り、取り組み方の違いを学ぶ中、学生が次のような感想をつづった。「今まで何度も壁にぶつかったが、その時は自分の良い状態の時の動画やプロ野球選手のプレーを見ていましたが、できる人だけを見ていて、やはり伸びずに終わってしまいました。自分には『わかる』という部分がなく、『できる』だけ見ていたので、今後の指導や様々な部分で利用できると思いました」。この意味は次の学生の感想に答えが見える。「異質集団には過去と未来をつなげること『できる』『わかる』を『つなげる』ことができると学び、なるほどと思いました。自分がつまづいたときにできない子（過去の自分）を見るとよいというのをはじめて知りました。異質集団はレベルが違うので時間がかかると出来具合も違うので教師の主体性を育てる力量が大切と難しい面も多いけど、現状の小学生、中学生には必要な集団での学習だと思いました」。それまで同質集団が当たり前の考え方に揺れが見えてくる。

教科内容と教材の峻別

学生たちは教材研究が大切だと、教職の様々な講義で教えられてはいる。しかし彼らがモデルにするのは一流選手や一流のコーチの指導であり、「できる」から「できない」におろしていく方法である。しかし実際にできない子ども・青年は、何ができないかが「わからず」、そのできないことに安住し、できないのは自分のせいだと勘違いもしており、それが意欲の減退にもつながっている。できないという身体のマイナスの資本を携え彼らにとり「できる」というあこがれは伏在しており、そこに教師は寄り添い、できない事実の原因を追究し分析し総合していかなければならない。その方法には、「なんのために」という自問自答が伴っている。教材研究も「なんのために」「どんな方法」での峻別が必要で、その「なんのために」、を考えるのが、教科内容研究であり、「どんな方法」で、と頭を悩ますのが教材研究である。「なんのために」、を把握できず「どんな方法」で、に取り掛かると、できない子どもは、できる意味を知らず、ただやらされているだけになってしまう。

講義 10. 学生たちは自らのスポーツ経験を吟味し、そのスポーツを授業で取り上げるための「なんで」と「どんな方法」で、を書き出しながら徐々に、二つの違いを理解していく。学生の感想である。「教材と教科内容は似ているようだけど、書き出してみると違うことがわかる。何のために（目的）が教科内容で、何を使って（手段）が教材だということが分かった」。

講義 11. 学習指導要領と保健体育について学び、体育の目的や領域や内容など構造的に把握する。

講義 12. 実際の体育の授業時の教師の所作や授業の運営法を学ぶ。感想である。「他の授業で模擬授業をやっているが、やはり自分は未熟で配慮が足りていなかったなと思った。どちらに背を向けて整列させるかを考えたことはなかったし、何も考えずに入り口近くに整列させていたが、今思うと生徒の気が散っていたらろうし、集中できなかったなと思った。逆にできて

いたのは大切な話は座って聞いてもらうことと、簡単な指示は立ったままであったこと。教師になったらこのようなことに注意して授業を行いたいと思った」。

秋学期には、Ⅲを元にⅣの講義で、実際に体育の学習指導案を作成し、模擬授業に取り組むことになる。

学習指導案づくり

保健体育科教育法Ⅲにおいて、体育授業に関する理論と方法を学び、学習指導案の作成に向けての基礎力を養っていった。指導案の枠組みを理解した後は、模擬授業に向けて学習指導案づくりの実際である。単元の目的や教材の特性、児童生徒の実態や指導者の指導観、評価の基準、単元計画、そして本時の指導案を完成させることで、模擬授業が実施できる。実際は、模擬授業の3週間前までに指導案の原案をつくり、4年生に添削してもらう。教育実習によりすでに現場での経験を持つリアルな意見は大変参考になり、教育実習に向けて意欲も高められる。この添削を元に書き直し2週間前に指導教員へ提出することになる。ここで完成形をつくるのだが、一人ひとり学生と面接をしながら指導案への指導を加え、ほとんどが訂正をすることになる。繰り返しの添削で1週間前に指導案を完成。最後の1週間は教具や用具準備をし、当日を迎えることになる。時には模擬授業の模擬授業を講義仲間や部活動の仲間とともに رفتり、生徒の実情を調べるために、アンケートを取ったりと意欲的な学生もいた。しかし中には前日まで指導案の指導が必要な場合もある。

Nは熱心に教材研究に取り組んだ学生である。専門競技はサッカーであり、小学校から大学生の現在まで一線で活躍している。その彼は模擬授業でマット運動を選ぶ。夏休みを利用し、民間研究団体である学校体育研究同志会全国大会に参加し、器械運動分科会で「できない子」や「みんな」にどのような理論と方法で迫るかを学び、その後も埼玉で開催される器械運動の連続講座に通う中で、マット運動の模擬授業に臨んだのであった。教材研究に没頭するということは、子ども・青年の「できない」に近づくということであり、「みんな」を意識することでもあった。その彼が指導の核としたのは「ねこちゃん体操」である。これは山内が集団研究を元に提唱した¹⁵⁾もので、「器械運動」における身体の動きを、様々な基礎運動の中から育て、マット、鉄棒、跳び箱運動に生かしていくものであり、その動きが猫のような所作があったことから子どもたちが「ねこちゃん体操」と呼ぶようになり、現在全国に広まっている感覚づくり運動である。

Nは学習指導案の中の「教師の指導観」で、次のように述べていた。「マット運動は『できる』『できない』がはっきり分かれてしまう運動である。できる人に合わせた内容にするとできない人が、できない人に合わせるとできる人が、つまらない授業になってしまう。皆がwin-winの関係になるようにグループ学習を行い異質共同で学ばせることが重要である」として「みんな」が「できる」ようになるために「わかること」さらには「生徒同士で教えあうことのできる環境を作ってあげなければなりません」と3つの技術ポイント(1、形態ポイント2、視点ポイント3、動作ポイント)を設定し生徒に意識させることにする。「その技の中で強調すべきポイントはどこなのかをしっかりと生徒達に注意をさせる。そこで、ポイントを抑えた模造紙や学習カードを用いてそのつど分析させる」という授業を組んだのだった。

つまり「できない」子を「できる」ようにするために「仲間」と「わかる」を媒介につなげるための異質共同のグループ学習を組ませ、その「わかる」仕組みとして、いくつかの技術分

析、それをノートに示し、生徒同士で取り組ませるという「みんな」を大切にしたい授業であった。

それが下に示した「本時の授業」である。なお、これは紙面の関係で訂正削除してある部分がある。

保健体育科教育法Ⅳ 学習指導案 本時の授業

学習内容・活動	指導上の留意点(指導○評価する点●)
<p>1. 器具・用具のセッティングを行う。</p> <p>2. 集合・挨拶・出席確認。</p> <p>3. 前時の振り返り。</p> <p>4. ねこちゃん体操(初心者向き)。</p> <p>5. お話マット(くまさんこんにちは、大また歩き前転側転、バレリーナ歩き)。</p> <p>6. マットの上に畳を2枚置く。</p>	<p>○怪我のないように安全に行う。</p> <p>○グループごと縦1列に並ばせる。</p> <p>○お話マットでは具体的に何をやったのが発問させる(くまさん、大股歩き、バレリーナのワードが出たらOK)。</p> <p>●みんなで歌いながらやらせる(知識・理解)。</p> <p>○感覚運動を意識させる。</p> <p>○大マットの上に畳を二枚重ねる(窓側にあわせる)。</p>
<p>1. 最初の位置に集合させて、本時のねらいと学習内容を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><ねらい></p> <p>○開脚後転に必要な体感操作と感覚養成(今後につながる「しめ」)。</p> <p>○グループで分析し教えあう。</p> </div> <p>2. <ステップ1>体の「しめ」を意識しよう(マット3枚)。</p> <p>○実際に1グループを動かしながら説明をする。(技のポイント、見ている人の行動、つま先がつかない人には補助の仕方、腿裏を押してあげる)。</p> <p>グループに分かれて学習…開脚後転シート参照。</p> <p>→畳を1枚とり、窓際に寄せておく。</p> <p>3. <ステップ2>回転と足を開くタイミングを練習しよう(マット2枚)。</p> <p>説明→グループに分かれて学習…開脚後転シート参照。</p> <p>→畳を1枚とり、窓際に寄せておく。</p> <p>4. <ステップ3>立った位置からやってみよう(マット1枚)。</p> <p>説明→グループに分かれて学習…開脚後転シート参照。</p>	<p>○本時のねらいを理解させる。</p> <p>○ルールの大切さを伝える。</p> <p>○安全を第一に行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p><ルール></p> <p>○1人3回連続してやらせる1回目、2回目はみんなの指示を聞きながら3回目は自分でつぶやきながら(連続してやらないと修正できない)。</p> <p>○グループ学習で動きを確認しあいながら取り組む(できないことをみんなで分析し、うまくしようと試みる)。</p> </div> <p>○説明の時にはその都度近くに集合させる。</p> <p>●開脚後転シートを使いながら行う(思考・判断)。</p> <p>○1人3回連続してやっているか、動作をしっかりと行っているか確認し、修正をする。</p> <p>●周りの人が声をだす(関・意・態)。</p> <p>●開脚後転シートを使いながら行う(思考・判断)。</p> <p>○できたら、改善が見られたら褒める声を出させる。</p> <p>●開脚後転シートを使いながら行う(思考・判断)。</p> <p>●滑らかにできるようにする(技能)。</p> <p>○できないポイント。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お尻とかかとの距離。 ・上を見ている。 ・背中をそらしている。 ・手が後ろに行きすぎ、肘が開いている。
<p>1. 集合・整列。</p> <p>2. 整理運動。</p> <p>3. 本時のまとめ、次回の予告。</p> <p>4. あいさつ・かたづけ。</p>	<p>○最初の位置に集合させる。</p> <p>○特に手首、足首、首を重点的にする。</p> <p>●学習カードを書かせる(知識・理解)。</p> <p>次回の目標も書く。</p> <p>○次回は開脚後転をさらにうまくさせること、そして発展させていくこと。</p> <p>○グループで協力して、安全に片づけをさせる。</p>

Nの振り返り

Nの模擬授業後の振り返りの抜粋である。「マット運動の授業を考えるにあたって、私が器械運動や同志会のような研究を通して学んだことや好きになったことを、みんなにもやりたいという思いがあり取り組んでみた。これを伝えることができれば、授業として成立する。」と考

ていました。大切、必要だと考えたのは3つ。楽しいと感じさせること。うまくなったと実感させること。誰かがうまくなったと考えさせること」と「できる」「わかる」「つたえる」を意識しており、「指導案を作るにあたっては良い授業をしたいが為に結構な時間をかけてしまいました。今のこの段階では良いことなのですが、教師になったらこんな時間はないと思うし、指導案なしで授業をするとなってもゲームを適当にやらせておくくらいしかできないなど考え、教師になる前の期間がいかに大事なのかと考えさせられました。」と現実を見つめつつ、「改善点として多くの人のコメントにも書いてありましたが中学生に対し、なぜの部分伝えられなかったことです。これは器械運動だけではなく、ほかの単元でもそうだと思います」とただやらせるだけではなく、子どもたちが「わかり」ながら「できる」ようになることの基本を振り返り、「私分かっているから生徒にこういえば理解していると思っていた。どんな意味がある、何につながるということを伝えること、さらには生徒が理解しているのかどうかを自分がわからなくてはいけない。それを改善点として今後に生かしていきたい。」とやはり「できない」と「わかる」を中心に体育の授業を組み立て、振り返っている事実が垣間見える。そして成功を実感したのは「授業後の感想や実際に話を聞いたりするとうまくなった、できるようになった、きれいになった、の声を聴くことができ、それは生徒側もうれしいことだし、教えている教師側もうれしい気持ちになり、これが教える側の楽しさだと実感した」と「できる」ことを土台に、授業を組み立て学習集団も意識しつつ、教師の喜びに触れ、最後に「今後は何の意味があるのか、何につながるのかというのは模造紙などで提示する準備をしようと思う。そうすれば授業の時に伝え忘れることもないし、生徒がより意識を持つと思ったからである。口頭でいうと聞いていない可能性や忘れてしまう可能性があるので、そうしていきたい。」と教具や教材の工夫を生徒の「わかる」につなげて考察できた振り返りであった。

模擬授業の評価

模擬授業後にNに私が渡したコメントの抜粋である。

「ねこちゃん体操の意味や何が次につながるのかの説明は大切です。中学生ならなぜ、この動作が必要なのか、何につながるのかを理解させるやり方が求められます。くまさん歩きなど、示範を示していましたが、生徒本人が行っている最中はわかりづらかったかもしれません。ここでも同じく『なぜ』が必要で、中学生は理解すると意欲そして、でき具合のレベルが上がります。また、説明そのものももう少し、注目させるべきです」と、やはり「なぜ」や「意味」を考えることから「わかる」そして「できる」につなげることを指摘しており、「開脚後転のやり方の説明は指導案にもしっかり書きこまれてあり、生徒へもきちんと伝わっていました。これはここまでの準備のたまものですね。開脚後転のシートも良くできていました。意欲的で工夫がなされています。グループではこのように本格的に分析できる材料を用意していたのは、私が担当した模擬授業では初めてです。感動的でした。材料があるので、グループで分析がはじまり、技術を間に生徒間のつながり、かかわりができ、レベルの高い授業になっています」とNが分析シートを用いて指導したことに着目し、異質共同のグループ学習に関しては「ここでもやはり技術が媒介となり、生徒同士の検討、話し合いが成立していました。いい場面でした。この流れの中で、生徒が授業者の説明を聞く姿も徐々に真剣さが増してきました。技術を媒介にしており、授業者を信頼してきたからです。そして生徒みんな、きれいに開脚後転ができていました」と技術を間に生徒同士がつながり、しかもその技術を分析するための道具が用

意されていたことを評価し、最後に「教えあいも成立し、『できる』にこだわる、そしてその成果がでた、授業でした」「『技術の大切さ』が伝わる授業でした。指導案もていねい、技術指導についてもきめ細やかに書き込まれ、最後のまとめでのシートも含め、レベルの高い授業です。夏の研究大会に参加し、自ら学ぶ姿勢が、このように、授業を成り立たせている。それを教えてくれた内容でした。特に生徒同士のかかわりが『技術』を間になされ、そのつながりでも、とりわけ『理解』を重視する新しい形の体育の授業でした」とNに伝えた。

そしてこのような学生の成長はNだけではなく、多くの学生が生徒の「できない」にこだわり、他者とのかかわりを重視する授業を組むことにもなった。

学生たちの変貌

これらの講義を受けた後、まとめとして再び学生たちに「体育の存在意義はなんであるのか」を考えさせた。先に体育は遊びだと思っていたIは本講義（保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳ）の受講を通し「大学で先生になるための授業をして思ったのは、『体育も、国語や算数と同じように教えたり、学んだりすることがある』ということです。体育もほかの教科と同じでスポーツを通じて人と関わり、どうすれば上手になるのかを仲間と教えたり、それを実行してみたりして成長させていく大切な授業なのだ実感しました」と記述した。体育も勉強だにとらえ直したのはIだけではなく、Fも「国語、算数といった教科と同じように体育も考えて成長する授業づくりが生徒たちを成長させていく本当の体育授業だと思います」と綴り、ただ単に身体を動かすこと、体力をつけることだけが体育ではないと学んでいる。Kiは「体育はただ身体を動かして体力や集団での協調性を身に付けていくだけではないのだと知りました。体育は健康に必要な身体能力はもちろん、知識なども身に付けて、さらに一人の人間をつくりあげるためにあるのだと知りました。ただ、授業をするのではなく、一つひねりを加えて、生徒に考えさせたり、それを生徒同士で共有しあうことで生徒自ら新しいことを発見したりする。そうすれば自分たちで行動してくれるような立派な生徒になると思う」と、身体の加工だけではなく、スポーツを中心に考えさせ、新しい発見をする場所であると考え、しかも「一人の人間をつくりあげる」のだと教育基本法の目的でもある「人格の形成」に寄与することを、体育でも担うのだと自覚している。中村は¹⁶⁾「体育指導の主要な目標は人間形成にある。そして、この形成される人間の能力の一つにボールを蹴るという運動も含まれている。体育指導では、このボールを蹴るという運動を教える中に、例えば民主主義ということをどのように盛り込み、指導してきたのかという問題を設定することができるであろう」と述べているが、わずか1年の学びの中で学生は、体育を教育の基本を担う「教科」であることを理解したのだった。

Yは体育の存在意義について、『できる』という道筋の過程の中で、各個人の課題を各個人で破っていくことが大切である。できるまでの道筋すべてが学びになっていて、実際に個々の身体が実験者として、実験台に乗っているのである。だから体育というのは、各個人の能力的な成長はもちろん、知識やその場で考えたという思考力、仲間との共に教えあいをしたなどのコミュニケーション能力など、深く学べば学ぶほど多くの能力が身につくのが体育の授業であるとまとめた。かつて出原は¹⁷⁾、学びの体育の新しい実践イメージを提唱する中で「習熟と認識の変革過程」を学習の対象にするとして、具体的には体育の授業の中で「できる」と「わかる」を核にその変化、紆余曲折をへて、教師の意図的な指導が入り、この過程の中で、自分たちの「できる」「わかる」の変化のプロセスを学習の核に据えるということと訴えた。Yのま

とめはまさに、この「習熟と認識の変革課程」を射程におく記述であった。

学生たちは自らの力で、答えを導き出していた。学生が取り組んだ学習指導案づくりと模擬授業は、かように彼らの中に体育の存在意義を新たに打ち立てることにつながっていたのである。

理想の体育教師像、体育授業

中井は¹⁸⁾一般的な体育教師像について「今日なお、専門職としての体育教師のイメージはなく、戦前の体罰を振るう権威的な体育教師及びクラブ活動の先生というイメージが依然としてつきまとっている」と述べ「体育教師が部活に熱中するのは周囲からそれを期待され、その役を引き受けているからであり、また、学校内での昇進の可能性をそれに求めているからだともいえる」と、本人というよりも、周りの環境が影響していると述べている。講義が始まる前のアンケートにおいて体育の存在意義とともに、「なぜ体育教師を目指すのか」の質問をした。恩師にあこがれてが、44人中18人(41%)であり、部活動の指導者にあこがれて体育教師を目指している者が高い割合であることがわかった。つまり彼らは体育の教師ではなく、部活動の指導者になりたく、その延長線上に体育もある状況であった。実際に学校現場で「部活動指導のために教師になったのであって、体育を教えるのは二の次だ」と考える教師は少なからず存在し、そんな教師は体育の授業もどこか投げやりだった。それは「体育教師」＝「部活教師」という周りの環境が後押ししているのだろうか、昇進が部活動指導で、または自己実現のために必要なのだろうか。しかし、この現状を変革し、体育を授業・教科として自覚する教師を育てる覚悟が求められている。つまり教師を育てる側の視点から、彼らの教師像の変革にも向き合わねばならず、その方法として学習指導案づくりの添削の繰り返し、模擬授業づくりの理論と方法の講義に取り組んだ。

1年を通した「保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳ」の講義の最後のまとめで、理想の体育授業像について記述させた。Kiは「生徒が教師に意見をいってくれるような授業。教師が教えるのは土台で、そこから生徒が自ら考えて行動することができる授業をすることが理想だと思います」と述べ、またKuは「先生のおかげでできるようになった！と言ってくれるのではなく、『〇〇くんが教えてくれた！』と言ってくれる授業。生徒同士教えあい学びあう授業。それを見て教師も学んでいける授業」が理想だと答えた。彼ら自身がつかみとる体育の授業ができあがる。本来の体育教師が浮かび上がる。

体育の存在意義再考－自問自答の必要性－

体育の存在意義について、学生自身がつかみ取ることが必要であるし、その学習の過程こそが、体育とはなんであるかの答えに近づいていく取り組みであろう。それは次のような答えの中からも考察すべき点が見えてくるからである「保健体育科教育法を通して体育の存在意義について触れてきた。ですが、まだまだ学ばなくてはいけないことがたくさんある。未熟な部分が多いので、今までの経験してきたことを一から振り返り、体育の存在理由を理解していきたい」と正直な記述である。「『体育はなぜあるのか』という質問に対して答えが何も浮かばず、頭が真っ白になりました。教える立場として何のためにやるか、という観点をしっかり学ばなくてはならないということがわかりました。この授業を通して、生徒目線から教師目線に変化することができたので、さらに向上できるように頑張っていきたい」。彼らはまだ体育という授

業の学びの途上でもある。実際、教材解釈、指導の順序、または授業準備も含め、足りないだらけの学生もいた。しかしそんな彼らは教育という取り組みの中で、先述した中井が述べるように¹⁹⁾「教師像を生み出している学校文化的背景を視野にいれた研究が今後ますます求められることになるであろう」として「体育教師には専門的な力量とともに人間的な資質が求められており、生徒に慕われるための努力が必要」であり、そのために学び続けるということが、教師としての資質につながり、その出発点に彼らは立てたのだと理解したい。

神谷は²⁰⁾体育の成立の根拠に触れ、「体育授業が成立する背後には運動文化がある」と考え、その「文化はみんなのものであり、私たちの生活を豊かにする」と述べている。その文化の体育とはなんであるかについて、中村は²¹⁾学校体育とは何を教える教科なのかについて、次のような答えを導き出した。「私は学校体育を『運動文化の継承・発展に関する科学を教える』ものと考えたい」とし、その背景として一つ目として、「そもそも学校の教科とは「科学」を教えるものでなければならないのではないか」とし、二つ目として「国民の健康・技術を保証していく根本には、国民の側にそのための『自立性』が確立していかなければならない」と考え、集団の持つ自立性に言及している。そしてそのための内容と方法を三つであると大別し「運動文化と人間の歴史」「運動技術の科学」「運動生活の組織」として、言い換えて「歴史」「技術論」「組織論」としている。これら「体育は何のために存在しているか」の問いと答えは、実践者、研究者の自問自答により導き出されている。

学生たちは体育授業の指導案づくりや模擬授業に向き合うことで、体育についての自問自答をはじめている。保健体育科教育法の講義によって、体育の存在意義についての意識化がなされた。その目覚めた体育への視線は、「できる」と「わかる」を生徒同士で「つなげる」授業に向いていた。この先には、子ども・青年の今を乗り越えるために体育の授業で何ができるのか、新たな地平の自問自答が待っている。

ここが私たちの出発点である。学生が、教科内容研究、教材研究、生徒の発達・生活課題の把握のための学びに向き合うことを持続していくために、「体育はなぜ存在しているのか」の自問自答の持続のために、何ができるか、体育教師を育てる側の理論と方法を、今後も分析と検討そして提起していきたい。

註

- 1) 伊藤敦美 教職志望学生の生徒指導に関する意識 敬和学園大学人文社会科学研究年報 第10巻 2012年5月 p.100
- 2) 久保健 教育学における教科(体育)の存立根拠と世界と日本の体育科の成立史 運動文化研究 Vol.10 学校体育研究同志会研究年報 1992年 pp.59-60
- 3) 中学校学習指導要領 保健体育編 平成29年3月公示
- 4) 城丸章夫 体育と人格形成—体育における民主主義の追究— 青木書店 1988年4月4刷 pp.9-10
- 5) 出原泰明 体育の授業方法論 大修館書店 1991年1月 p.18
- 6) 前掲5) p.22
- 7) 駿河台大学現代文化学部教務課(2018年)保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳシラバス駿河台大学ポータルサイト. <https://p.surugadai.ac.jp/camweb/top.do>, (参照日2019年1月21日)
- 8) スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり—指導案の基本とプラン集— 学校体

育研究同志会編 創文企画 2018年3月

- 9) 川口智久 水泳らくらく入門 岩波ジュニア新書 岩波書店 1994年6月
- 10) 矢部英寿 中学校のバレーボール –スパイクとラリーの矛盾を問う– たのしい体育・スポーツ 2010年2月号 創文企画 pp.8-11
- 11) 殿垣哲也 「できる、わかる」にこだわった「あてっこペース走」の実践 たのしい体育・スポーツ 2017年秋号 pp.36~41
- 12) 重原健二 なっおもしれえだろ 「この学校がオレを変えた–浦商定時制の学校づくり–」ふきのとう書房 2004年6月 pp.132-133
- 13) 平野和弘 定時制高校生の心身を解放した卓球の授業 体育科教育 1998年11月号 大修館書店 pp.40~42
- 14) 平野和弘 オープン・ドア・ポリシーに学ぶ卓球の授業 たのしい体育・スポーツ 2008年9月号 創文企画 pp.18-19
- 15) 山内基広 ねこちゃん体操からはじめる器械体操のトータルプラン 創文企画 2007年
- 16) 中村敏雄 学校体育は何を教える教科であるか「中村敏雄著作集1 体育の教科成立論」出原泰明編 創文企画 2007年6月 p.148
- 17) 出原泰明 異質協同の学び–体育からの発信– 創文企画 2004年7月 pp.103-104
- 18) 中井隆司 体育教師論 「体育科教育学の探究–体育授業づくりの基礎理論–」大修館書店 1997年5月 p.391
- 19) 前掲18) pp.391-392
- 20) 神谷拓 体育は何を教える教科か スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり–指導案の基本とプラン集– 学校体育研究同志会編 創文企画 2018年3月 p.2
- 21) 前掲16) p.150